

三河 アララギ

2021年 令和3年5月 皐月

五 月 号

第 六 十 八 卷 第 五 号



ニューヨーク日記(175) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

JAPANESE CAVIAR

Blue Shoe Diaries



ファンシーなお寿司屋さんで日本のキャビア食べたら出汁で味付けしてあってとても和な味に！美味しかったよ！ やっぱり日本食、日本の味が1番。コロナ禍の中家族だけの貸切で贅沢したぞ。

I had Japanese caviar for the first time. Rather than going for a fusion cuisine approach, this one was brined in dashi, giving it a subtle but very Japanese flavor. I think I like it! Especially when handled by a sushi chef at one of my favorite sushi restaurants.

目次

第六十八卷第五号(通卷八〇九号)

表紙・新玉葱

今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(175)

Blue Shoe(2)

アカンサスの徑

御津 磯夫(4)

かぜくさ

大須賀寿恵(5)

歌集『續々草々』

今泉 米子(6)

かぜくさ

牧野 錬子(7)

春眼

岡本八千代(8)

路の臺

弓谷 久子(10)

八重桜

今泉 由利(12)

週末に

安藤 和代(14)

うぐいす

清澤 範子(15)

まだ続く

伊藤 忠男(16)

図書館

矢崎 直人(17)

野花

森岡 陽子(18)

御馬港

白井 信昭(19)

十年

杉浦恵美子(20)

袴姿のひな子

山口千恵子(21)

春の七色

夏目 勝弘(22)

『いんよせ』

いーはこぶ

吉見 幸子(24)

牧原 正枝(24)

森 厚子(24)

山崎 俊子(24)

三田美奈子(24)

水野 絹子(25)

牧原 規恵(25)

稲吉 友江(25)

鈴木美耶子(25)

現代学生百人一首

東洋大学

佐々木心宇(26)

国則 恵(26)

菊池今日子(26)

奈良澤杏夏(26)

曾我 宗功(27)

石井さくら(27)

堀内 祐希(27)

本田 和奏(27)

森岡 陽子(28)

高橋 育郎(30)

山元 正規(32)

重野 善恵(32)

松本 周二(32)

田中 清秀(33)

浜田 紀政(33)

森岡 陽子(33)

木村 歩歩(34)

植村 公女(34)

矢崎 直人(34)

今泉 如雲(35)

今泉 由利(35)

田中 清秀(36)

丸山酔宵子(38)

山本紀久雄(40)

今泉 雅勝(42)

本田 勇氣(44)

江上 浩二(46)

平井 茂行(48)

中屋 保之(50)

横山 精真(52)

今泉 由利(54)

夏目 勝弘(56)

岡本八千代(57)

今泉 由利(58)

贈呈誌

童話『鬼の子栗太郎』

『俳句』

『酔いの徒然』(109)

楽しい時間(102)

絹の話(126)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

『江上浩二の独り言』

漢詩研修(五十五)

『仙台の仲間達』

小斎偶成

石神井川

旅人芭蕉(1)

『氷魚』のことから(24)

編集室だより(二〇二二年三月)

野菜・果物・まんだら(39)

『三河アララギ』について

(60)

(59)

(60)

(60)

アカンサスの徑

御津磯夫

傷むもの傷むを救ふゆゑを知る風のさそひにまだ散らぬ花

疎々になりたる御油の松並木手に触れたしといふわが小女子

松並木古りてのこれり見に来ればあたかも晩き山さくら花

化け狐棲みし竹藪の花に枯れあとかたなけれ御油赤坂や

岩船は苔に動かず立ちそろふ八重葎のみどり波とそよぎて

はからひなく散りゆく花をたのしまむ石の上にもとどまりありて

歩みゆく鳩とぶとときに地の上の昨日の花もともに舞ひたつ

一言の神の一言をかしこみて心にもとむその一言を

鉢の中に生きのび大きくなりしかば地に移さむ那智の柵の木

深溝の山の寺より来し種子の白檀木の木かげひろがる

かぜくさ

大須賀寿恵

傾ける防潮堤に吹きつけてつもりたる雪ははだらはだらに
くれなゐの萎えたる花を三つ落しカニサボテンは今年を終へる
池の面の今朝のうすら氷音たててわがそそぐ水に沈みゆくなり
どの家も昼の灯のともりゐて寒に入る日の雨降り続く
原因のなき不安感持ち続け夕べ炬燵に吾が子と寄り合ふ
麦の穂のゆるがぬ青き夕べにて鳥ら相呼ぶ裏庭に立つ
うづ高く渚によれる貝殻はみなひといろのとき色にして
石につき石に乾ける青海苔の青てり輝くを採ることもせず
日直に出でゆくといふ吾が子の声うつらに聞きてまた眠りたる
底ごもる食用蛙の鳴く夜半に去りにし人を思ふたまゆら

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

日曜日の診察室にひとり来てわが体重を計りてゐたり

布袋葵の立花けさの紫を診察室のテーブルに置く

雷雨過ぎメタセコイヤの今朝の窓ぬれし緑の清々として

深々とひろがる緑の草の上南瓜の花の一つ黄のいろ

裏庭の櫛の梢を白き雲の流れゆく見ゆしばし佇ちゐる

部屋毎に昨日活けおきし狐かみそりの剃刀今朝花瓶よりとび出しゐるを

三河なる三つの深井と伝はりゐて井戸杵組は名倉砥切石

花過ぎて出でくる葉こそ大切にと教へて渡す今日も幾度

珍らしみ図鑑に調べし一本が今年群がるウジコロシといふ草

わが部屋に父よりの金庫据えてあり扉を開くこと知らずして

かぜくさ

牧野 鍊子

夢に見し母若かりき今暫し眼を閉じてゐむじつとしてゐむ

紫草の細き一本を軒先に培ふ見れば歩みをとどむ

魚を焼きし匂ひの部屋に残りつつ夫は胃の薬われは風邪薬

外濠に乏しく咲ける白野菊老爺一人来て摘みて行きたり

はじめての合ひ逢ふ集ひより帰りきて繕ひ刺せる足袋にはきかふ

雨戸とざすことも一日の常にしてけふ十三夜の月にやすらぐ

いにしへを陳ぶる土器にまじりつつ一つ小さき涙壺あり

少し派手かと思ふ服着てゆかむ似合ふといへば老いもたのしも

庭に埋めて忘れゐたりし浦川の牛蒡が土をもり上げて萌ゆ

あこがれし萩の城下に二人来て日の暮れ果てし萩橋渡る

春 眠

蒲 郡 岡 本 八 千 代

わが春眠暁を覚えて早起きすああ歌稿のメ切あと二日間

コロナ禍に新しきま白のマスクして老ゆ人我はお菜買ひにゆく

やうやうにわが「氷魚」の稿を速達にて今日こそ出したり昨夜は徹夜して

木瓜の木に木瓜の花咲きくれなると淡きくれなるとにわが庭の中

この木瓜は父の盆栽父亡き後われが地面に移し替えし木瓜

漱石も木瓜を愛でたる人と聞くこのままそのまま自然の木瓜にす

かにかくに春の夜半のすぎにつつ歌稿の清書しておかむ

松山の子規記念館長美喜先生よりわれ宛の手紙下され嗚呼

「茂吉のこと楽しみよ」と書かれをりわれこそ眼熱まなこくなりきぬ

岬の町西浦に生まれて育ちし私ああまうじき百歳如何いかがなるのか

「氷魚」の稿速達にして昨日出したり何とはなしに心ルンルン

ひたすらにわが天つ人を偲ぶ心われにありつつ無きつつ活くらす

わが机の上の復古紙に書いてあり「老いてゆくプロセスもいいじゃないか」と

朝食を昼にすませてひとり読む「何とかなるよ」ともこの復古紙

西かたの方はやも茜の淡々し私の一日も暮れてゆくのか

落の臺

豊川 弓谷 久子

子の編みし雛並べ置く飾り窓五段飾りに桃の花添えて

春の嵐の子報聞きたり軒下に取り入れ置かむパンジービオラ

夜もすがら春の嵐が吹き荒ぶ浅き眠りのあかときまでも

知らぬ間に伸び立ちゐたり落の臺庭の片隅若草色に

植え置きし去年の球根チューリップ葉の間より蕾見え来る

二十年近き年月思いをり餉いし猫が今朝息ひきとりぬ

キルティングの肩かけバック二つ縫ふ子と子の友にと揃いの二つ

春の彼岸に母は逝きたり今日の如くあの日も雨の一日なりき

老いてより短歌を詠みし母なりき遺品の中の啄木歌集

母に逢ひし夢の中にて二言三言交した言葉が思い出せず

子の届けくれたる寿司を乐しまむ春の彼岸の今日は中日

子に誘はれて今年の花見も広幡神社染井吉野の古き大木

満開の木下に佇ちて仰ぎ見る馴染みも深しこの一本

久びさに町を歩みぬ昔のままに残りゐる家なつかしみつつ

新しき家建ち並ぶこのあたり景色も変りぬ世も移りゆく

八重桜

東京 今泉 由利

ビタミンD自らつくる自らに午後の斜めの日溜まりのもと

巨大過古ありたることのまざまざと石と化しをり巨大とんぼ

滞りなく過しをりこの日々を大きな過去を礎いしづえにして

こともなく往復したりき四万キロ地球単位の距離の親しい

興福寺の八重桜が満開なりと後鳥羽天皇建久六年のこと

下の千本中の千本上の千本奥の千本桜花満ち満ち

神様と献木されし数万本静かに静かに花咲き満つる

何国語も必要のなきひとときよ吾が子等とのコーヒータム

九ヶ月先に味噌と成熟すNYっ子の仕業残りぬ

あんなことこんなことも仕終へたり今日の一日も終りゆきゆく

母は亡し竹の子はどうすればいいのパソコン広ぐパソコンに教はる

竹藪が引越しをして来しごとくダンボールいっぱい竹の子届く

皮を剥く灰汁ぬきをするうす味に味付けをせし竹の子香る

地球なる人口78億人その数字の一人は私ですよ

人間の世界に通用しないような自分ひとりのひとりごち

週末に

豊川 安藤 和代

この年も生きるぞ生きよう頑張ろう友とピンクのパールツク買う

喜怒哀楽すべて話せる友のいて私の心の花も満開

半切のみかん木枝にさしおきてヒヨに目白と賑やかな庭

「食べてるか眠れているか」と娘から週末にくる電話のうれし

娘が来ればなぜかその日は気分良し医者に行くより薬のむより

幼き日キツネの出し谷川坂今カラフルな家建ち並ぶ

音高くあちこち田起すトラクター今朝より大原春めきてくる

コロナゆえ暗い日の中吾が家に祝い事ふたつコーヒー旨し

電子辞書吾れには合わず色褪せてペラペラめくるこの辞書が好き

変声期の少年の声思わせて弥生の庭に鳴くあま蛙

うぐいす

春日井 清澤 範子

わが郷の足助の郷の香嵐溪今年も報じるカタクリの花

うぐいすは金木犀の若芽の中ケキヨケキヨ鳴きて飛び立ちゆけり

わが庭に梅の小枝はなけれども鶯うぐいすはなく夜明けとともに

朝食の仕度ひとに一時うぐいすの声幸せ気分にて作る味噌汁

物が二重に見える吾なり右の眼を名大病院にてかかる斜視外来

右の眼が二重に見える検査にて視力をはかりて網膜には異状なし

鶯の声をききつつTの字の廊下にモップかけ始めたり

吾が腰の痛みに介護3認定となる巾広ベットを貸出してもらう

介護ベットで一週間は早や過ぎぬ手すりしつかりつかまりながら

心不全にて受診する夫は即入院す特別室なり回診を待つ

わが夫が作りし南瓜色づきてほっこり味わう今日の夕食

まだ続く

大阪 伊藤 忠 男

服装を整えWEBカメラ前今日も始まる在宅勤務

我なればあれをこうするここはそこやはり遠きやりモートワーク

どこにいるかわからぬ敵に立ち向かうこんな戦い負け戦なり

日の光浴びてまぶしき初夏の風両手広げて深く吸い込む

我負けじ煌めく星に真珠玉目尻あしらうフェイスガードで

十年に一度のはずの水害に毎年出会う時の速さよ

特別の夏となるのかオンライン法事帰省もバーチャル世界

マスクして左手スマホ右手ファン今年の夏のスタイルなりや

メルヘンと縁なきこの世今日もまた書類手にしてズームに電話

嘘に嘘重ね誠にすり替える同じ価値観ならざるなりや

図書館

東京 矢崎直人

咲き誇る梅の木夫婦メジロかな人に慣れおり密を吸い吸い

雨上がり開いた桜群がりぬよそんちの花鳥でなくとも

春の日の散歩の道の草花の日に日に増えて歩くの楽し

帰り道欲しいの安くスーパーでついでついでに籠に入れたり

図書館のあと十分に閉まりけり気づいて風に逆らい走る

窓を打つ雨強かりし春嵐今日何機目の飛行機の音

忘れるな忘れられない風化せぬ被災地の声拾うラジオの

震災の十年よりもこの一年人間関係コロナ禍変える

歩き出しすぐ降り始め春驟雨散歩途中で引き返したり

春はやて花びら落とし罇ばかり雀メジロも今日はみれずに

野 花

東京 森岡陽子

赤坂のホテルの庭も春迎へ桜も開花うぐいすの声

太鼓橋ぬけて流るるせえらぎに沿うて咲き出す黄水仙の花

うぐいすの声を掻き消す園の滝こま鳥雀も消されし鳴き声

落花して尚美しき紅色の椿の花の潔きまま

花嫁の先撮り写真は庭園の松の木の下桜の木の下

鷹鳩化日差しの中を幼児と母おそろいのピンクのセーター

和食屋の暖簾おろすも此のコロナ思い出づくりも集まれず

はだか木のはびこる根方の間々に咲く堇が運ぶ小さな春

雨上がり多摩川の土手春さぐる野花咲き出す囀り聞ゆる

御馬港

豊川 白井 信昭

ひねもすを春の嵐は吹き荒び庇のエスロン打ち靡く音

西風吹けばわが在所にて聞こえにき海岸の松騒めく音

吹き晴れて青ひと色に広く朝トンビ一匹が中空を舞う

遠面にも黄砂花粉に霞む景色今日もマスクかけ妻と家をでる

雛様の飾りもなけれど雛祭り今日という日の人形焼買う

啓蟄の今日という日のわが居間にゴキブリ一匹這い出てきぬ

東のさ庭花壇ひんがしに一株のガクアジサイを植え込みにけり

夕食は春を先取る通販の桜花弁入り炊き込みご飯を

仰ぎ見る切りたつ崖の上青空に映えて美し山桜花

寂れたる御馬港さびに繋がりし漁船今なほ三十隻余り

十年

蒲郡 杉浦恵美子

頂をちよつと摘んだ五井山を今朝も仰ぎぬ我がよりどころ

東北の震災十年我が夫も逝きて十年忘れ得ぬ年

大津波クルマを呑み込む映像を声失ひし夫と見入りき

この頃は生身の夫が遠のけり十年経るとはかふいふことか

今は夫を偲ぶよすがは写真のみ十年我はこんなに変はりぬ

旋風に竹叢覆ふ全山が右に左に揺さぶられ居り

雛人形出さなくなりて三年目この頃客も来ぬ我が家には

春日山東に浮かぶ大島のこの角度こそ綺麗なかたち

大島は我が夫カヤツク操りて渡りしところ無人島なり

我が宿の垣根に芽吹く露の臺ヨモギユキノシタこれは天麩羅

袴姿のひな子

豊川 山口千恵子

鮮やかに連翹咲きていたりけり袴姿のひな子と歩く

楠落葉踏みつつ路地をポストまで歌稿の入りし封筒持ちて

乾きたる洗濯物をとり込みぬ暖かき日のぬくもり残れる

香りつつ白き花咲く沈丁花挿し木に根付きはや幾年か

列なせる休耕田の麦の畝吹きぬる春の風に光れる

わが組のお庭草の分担は佐脇神社の築山清掃

貫ひたるサイネリアの鉢下駄箱の上に置きたり紫の花

真白にぞ白木蓮の花咲けり花びらゆらし風の吹き過ぐ

自転車に積みてゴミ袋運びゆく集積所まで二往復する

暖かき春の一日の暮れゆきて夜更け窓打ち雨の降りくる

春の七色

豊川 夏目勝弘

ミカン草の冬の緑に密やかにヒメオドリコソウの細き紅くれない

いと細き黄色の薔の一つ二つオツタチカタバミの一本うれし

延べ段の石と石との空間にイヌノフグリの小さき青花

白梅しらうめの花はやばやと散りしきる舗装の黒を彩る花弁はなびら

いち早く薄紫の花の咲くタチツボスマレを久しく見ない

切通しの駅の傾りの枯れ草をもたげて丸まるフキノトウ出づ

ロウバイの花は散るなし確りと枝に残りぬ種たねとなるまで

杉林の間を通りコンビニへ北風強し煙りなす花粉

電気料やや少くなくなりてきぬ春となりゆく証なりけり

平等に春は総てにやってくる今日の一日を穏やかに生きん

味噌煮込みのうどん作るも稀れとなり冷凍うどんがまだ残りをり

書齋にて座りてゐる真横より今日の日の出が水平に射す

大海より銀波よせくる伊良湖岬行きてやみたし直ぐにも行きたし

人麻呂が芭蕉が浮ぶ伊良湖崎ただに春を感じてみたい

局長となりて伊良湖の郵便局に勤める友を尋ねてやみむ

『ハルカ』

西浦公民館 いーはとぶ

元旦に鏡餅あり注連縄あり例年通りわが家は築八十五年
コロナ禍の年始に来たる分家二軒小人数も良し盃を酌む

吉見幸子

質問か糾弾なのか会見の記者なる人の顔は映らず

牧原正枝

五十三歳の母百歳の義母ふたりには二十五日が月命日に

初花の薄紅さして咲く花に煌めく海に笑顔撮ってね

森厚子

いただいた高齢者向け商品券持ちて六角堂のステーキ弁当求む

庭にゐて草ひくその根の土深し力いっばいひかむとしつつ

山崎俊子

風強き今日の一日は本読みてゆるりとすごす冬の陽だまり

とり溜めし録画をけふも見てをりぬ緊急事態宣言まだ続きつつ
散歩にはスマホをバッグに入れてゆく位置情報の電波零こぼしつつ

三田美奈子

バスに乗り届けてくれし露の臺今夜は熱々春の香愉しまむ
うかうかと歳経ふり来ぬと思ひつつ寒夜の閨ねやに夫の寢息

水野絹子

コロナ禍に金婚式を迎へたり感謝の気持メールにて伝ふ
娘より夜半のメール届きたり日々の出来事思ひ出と共に

牧原規恵

有るだけの柚子を湯舟に浮かせをり今日の一日の小さき幸せ
初物の菜花湯がけば鮮やかなさ緑深し春めく厨

稲吉友江

小さき机南の窓辺に持ち寄りてわがメモノートしばしを開ける
今朝の朝八度さしゐる寒暖計子の置きゆきしを今も吊せり

鈴木美耶子

現代学生百人一首

東洋大学

弾き終えた最後の鍵盤両の手で心はずませ音色は残る

千葉市立緑町中学校二年

佐々木心宇

「待たせた?」「今来たところ」とはにかんだ今は約束の二十分前

大田区立貝塚中学校三年（東京都）

国則恵

テスト前クラスで飛び交う「やってない」手口巧妙やってない詐欺

大妻多摩高等学校一年（東京都）

菊池今日子

外出ればひっきりなしの情報に疲れた私を包む祖母の手

学習院女子高等学校二年（東京都）

奈良澤杏夏

「もういい」と言っても聞かず手をつかみ十四才児の爪を切る母

慶應義塾中等部二年（東京都）

曾我宗功

朝早く平成最後と目をさますテレビつけると令和であります

京華商業高等学校三年

石井さくら

病院で名前を呼ばれてついていくいつもと違う母の背中に

光塩女子学院中等科二年（東京都）

堀内祐希

墓参り花供え聞こえし祖母の声いがぐなつたと茨城訛り

国土館高等学校三年（東京都）

本田和奏

贈呈誌

森岡陽子

秋楡 第110号

○透明な盾あるくらしにみつみつと棘の生えゆく年の瀬となる

三原香代

○枯れながら名残の花を咲かshめて天を彩る秋の朝顔

坪根恭子

○車庫入れにモニター画面の点滅す電子音して威嚇烈しき

木村郁子

○声出さず唄いゆくなり御詠歌を鈴りんの音色に導かれつつ

杉谷良子

○赤き刃のような三日月ひくくありたるがやがて黎明に消えてしまえり

杉山千里

冬雷 2021年 4月号

○過去は過ぎ未来ははまだ来ぬゆゑに愉しく生きん確かな今を

天野克彦

○大寒の朝仰ぐ富士岩肌の見えて寂しも白雪のなし

有泉泰子

○突風にイトヒバの吐く雪の幕木々や山並しばし目つぶし

山口 嵩

○少しづつ日脚のびたる実感にゆふべ茜の雲を見て佇つ

水谷慶一朗

○うつすらと芝生に霜置く公園の蛇口に光る水滴の落つ

鈴木やよい

○こだはりてゐるは空しもなりゆきといふ平安もあること思ふ

山本貞子

○大寒となりていよいよ春近し雪山に朝日の朱の光みゆ

村山美江

○僅かなる歩みに疲れ寄るベンチ朽ちたる木肌ぬくみを持てり

古嶋せい子

○ふうはりと消炭いろの空ともす八分咲きなる白梅の花

中島千加子

○簡潔な冬の柿の木枝々の先まで寒の緊張をして

井上菅子

童話「鬼の子栗太郎」

高橋育郎

しばらくあるいていくと、おおきなおやしきが みえてきた。おだいじんのいえた。

おだいじんのいえにつくと、ひとやすみしてから みんなで、こんやの とりものの さくせんをたてた。そして夜になるのをまつたのだ。

やがて夜がふけてくると、三人組のぞくがあらわれた。すこしのあいだやしきのようすをうかがっていると、さいしょの一人が、へいによじのほりにわにとびおり、やねにあがった。にかいのあまどをはずしてはいろうとしているのだ。つづいて二人めがはいった。三人めがへいに足をかけたとき、きじがやねのぞくをめぐけてとびたちぞくのあたまをつついた。ぞくは「いてえいてえ」となきさけび、やねからころげおちた。こしをつよくうって、うごけなくなったよ。二人めは、びっくりしてにげろとちかくの木によじのほっていった。それを見ていたさるはとびだし、めにもとまらぬはやさで木にのぼりぞくの足をひつかいた。ぞくは「いてえいてえ」となきさけび、高い木の上からおちて、うごけなくなったよ。栗太郎はここぞとばかりに、二人のぞくとびかかり、なわで手足をしばりつけた。

三人めのぞくは、へいの上からこれを見て、びっくりしてとびおるやいちもくさんににげだした。にげられてたまるもんかと、こんどはいぬがおいかけた。いぬは、ぞくのせなかをめぐけてとびかかった。いきおいがよかったので、ぞくはまえのめりにたおれそうになった。そこに栗太郎さんがおいついて、ぞくのまえにたちはだかった。ぞくは、栗太郎さんにくらいついてきた。栗太郎さんは、みごとなせおいなげをきめて、ぞくをたおし、うえからのしかかかって手足をなわでしばってしまった。

「どうだ、まいったかア」

ぞくは「まいりましたア」と、ひめいをあげたよ。

夜はしらじらとあけてきた。おだいじんは、いえの中でようすをみていたが、桃太郎さんいっこうのはたらきがあまりにもみごとなもので、手をうってよろこびながらでてきた。村のひとたちも、このさわぎになにごとかとでてきた。桃太郎さんと栗太郎たちが、ぞくをひたてて、おだいじんのいえのまえにいたのをみてだいかっさいになった。

そして、おだいじんは、ぞくどもをひきたて、そろってだいかんしょへいったんだ。

桃太郎さんいっこうは、おおてがらをたてあつばれとごほうびをたくさんもらい、いきようようとして村びとたちが、ばんざいするなかを、いさんでひきあげていった。

さて、栗太郎はりっぱな、まにんげんになったので、桃太郎さんにおれいをいって、鬼が島へとかえることにした。おじいさんおばあさんそれにいぬさるきじみんなが、栗太郎がりっぱになったことをよろこんで見おくってくれた。

栗太郎は、「みなさんまたおあいいたしましょう」と、手をふってわかれたんだ。

島へかえると、ここでも、みんながでむかえてくれた。ところで、栗太郎がなによりもびっくりしたのは、あの赤い顔をした赤鬼も、それから青い顔の青鬼も、みんながまにんげんになっていたことだ。それを見た栗太郎はまたあのだんぐりまなこを、クリクリさせたよ。

島の人たちは、よろこびいっぱいいでふえやたいこをもつてきて栗太郎をかこんで、歌をうたっておどったんだ。それはそれはおまつりみたいでにぎやかなことだった。

鬼が島の鬼どもは、みんなまじめにはたらいいたから、きつとかみさまがまにんげんにしてくれたんだな。めでたし、めでたし。

(おしまい)

『俳句』

陽炎や島の短き滑走路

山元正規

廻廊の連子窓開く彼岸寺

茶柱の茶を譲り合ふ蝶の昼

芍薬の角芽解れし昨夜の雨

重野善恵

植ゑもせぬ野蒜健やか庭の隅

笹の中ぶしゆつと息す蜺かな

黄梅の滝落つるごと咲きにけり

松本周二

われと似て迷い子なりや蝮の道

杏咲く市長選挙の小学校

膝小僧を大きく曲げて蝌蚪の池

田中清秀

白蝶や川原の石をすれすれに

雀らにベンチ取られて春うらら

連絡船に仏花積込む彼岸前

浜田紀政

退院は桜の頃と励まされ

愛猫の潜りこみをる春眠し

そこ此処に切株の椅子山ざくら

森岡陽子

花冷やポケットチーフの紅の色

野焼あと二羽の野鳥の歩みよる

老いてなお小さき雛を飾りおり

木村歩歩

菜畑に土の匂いや朝歩き

春霞人を求めていそぎ足

揺れつつも風に負けじと咲くミモザ

奥付に昭和見つけし花の昼

植村公女

桜東風園児の列の乱れをり

真夜の地震ゆれざるものに春の月

雨予報散歩の道にすみれ咲く

矢崎直人

帝釈天夫婦メジロ人に慣れ

春の日やびわ湖マラソン日本新

春雪や博士論文審査会

今泉如雲

浅春の夜や三ツ星は水平に

春磯や二〇一一年のこと

風神の放ちし風よ花吹雪

今泉由利

未来への思ひ託して桜散る

目を閉じて心の内の桜花

引き抜くはま白きまるの野莉です

かさね吟行会

「ホテルニューオオタニ・日本庭園」 3月

田中清秀

ものの芽やパステルカラーの色柔し

正規

佇めば緋鯉寄り来る辺りかな

善恵

春うらら絵具色めく池の鯉

素山

三ヶ月ぶりの吟行である。一月、二月と自粛生活を余儀なくされてやっと屋外の空気を吸えることになった。今回は紀尾井町に有るホテルニューオオタニの日本庭園を訪れた。令和三年三月十二日、穏やかな花曇りの一日となった。桜にはまだ早いが園内に咲き始めた躑躅と新緑の松や楠の若葉が特に美しい。

紀尾井町の名は、この界隈に屋敷を構えていた紀伊徳川家、尾張徳川家、そして近江彦根藩の井伊家の頭文字をとって後に名付けられたものである。その中で井伊家の屋敷跡は、戦後伏見宮邸であったが、ホテルニューオオタニの創業者故大谷米太郎氏が買取り、荒れ果てた庭を改修して自邸としていた。東京オリンピック開催の時に、政府の依頼を受けてここにホテルを建設し、そして日本庭園はその一部となった。現在、庭園はホテルの利用者に無料で開放されている。

四百年余りの歴史がある庭園には、大小の岩と松の樹で山の雰囲気をかもしだす枯山水、佐渡金山から運ばれてきた独特の色彩の赤玉石、木の根がそのまま化石となった珍しい石など見所が多くある。広さは四万平方メートル、池泉回遊式庭園で、池には緋鯉や真鯉合わせ三五〇匹が優雅に泳ぎ、さらにウグイスやメジロなど様々な小鳥の鳴き声がどこからか聞こえる。特に中央にある朱色の太鼓橋は緑豊かな景色に映え、絶好の撮影ポイントになっている。折しも美しい和服姿の若い女性が家族で記念写真を撮っていた。

太鼓橋渡る人影水温む

正規

赤石に沿うて一叢黄水仙

陽子

池底に重なる松葉水温む

清秀

濠と大小の木立に囲まれた散策路には、寛永寺の灯笼や鎌倉時代の形式を残す六角形の春日灯笼、桃山灯笼な

ど四二基にのぼる灯籠が道の斜面や池の畔に佇んでいる。さらに、天明年間（一七八〇年）からこの地に育成されているイヌマキとカヤは貴重な樹木として千代田区の天然記念物である、江戸時代の風情をそのままに残している。また、園内には和楽庵という当時の皇太子が訪れた茶室も有り、懷石料理のなだ方が経営する山茶花荘は大谷米太郎の自宅だった建物で、数寄屋風の日本庭園に相応しいたたずまいである。

予約するホテルのランチ木の芽時

さち子

花嫁や春のホテルの雑木林

しのぶ

水音に負けぬひと鳴き初音せり

素山

紀尾井町の歴史をふり返ると、一八五八年尊皇攘夷派により大老井伊直弼が暗殺された桜田門外の変、一八七四年には赤坂喰違御門付近で岩倉具視が襲われ、一八七八年清水谷前の道で時の内務卿であった大久保利通が暗殺されるなど、多くの歴史の舞台となっている。激動する幕末や動乱の歴史に思いを巡らせながら美しい庭を散策するのも意義深く、また楽しい。

庭の奥まったところには高さ六メートル、組石と玉石

三トン、大石二トンを使用していると言う大きな滝がある。流れ落ちる水音は此処が大会の真つ只中であることを忘れさせる。傍らに腰掛けて爽やかな水飛沫を受けて初春の風を感じながら、ここでゆっくりと句作に入る。句会はホテル内にあるスキヤキ料亭「岡半」の一室を借りて昼食を取りながら行った。コロナ禍で籠もりがちな生活から離れ、久しぶりに楽しい一時をみんなで過ごした。ただ、散策も食事も三密を回避して感染防止のマスク着用を守りながらであった、それでも和氣藹々いものように嘯目三句出し四句選で行い、今年初めての吟行会は無事にお開きとなった。

『酔いの徒然』(二〇九)

丸山 酔宵子

『昼下がりの「もっきり」』

緊急事態宣言再発令で、またまた世の中は自粛、自粛、自粛の日々が続いている。

今から75年前、欧米列強相手に無謀な戦争に突入し、我が父母世代が須らく悲惨極まりない日々を経験してきた。空襲警報が鳴れば、家の裸電気にカバーをかけ、光が外に漏れないようにして敵機の襲来に備えるとか、防空壕や疎開、配給制など今では考えられない生活を強いられたのである。

「欲しがりません勝つまでは」「月月火水木金金」「我が家から敵が打てるぞ経済戦」「聖戦だ己殺して国生かせ」「権利は捨てても義務は捨てるな」「一億抜刀米英打倒」「いやいや、凄まじい戦時標語の数々で、その当時の世相がまざまざと蘇ってくる。

更に贅沢禁止は徹底し、特に酒を諫めたスローガンに

は驚かされる。「飲んで何が非常時だ」「コメが足りぬにまだ飲むか」「赤い顔から赤字出る」「酒屋太れば妻子は痩せる」「増える酒量に減る寿命」

その当時の戦時体制と現在の世界を襲っている新型コロナ禍とは比較すべきことではないが、国家を挙げての行動の自粛では同じものがある。特に「三密」を避けての飲食店の営業は午後8時までで、アルコール提供は午後7時オーダーストップとなっている。

そんな中で、最近は自宅飲みが多いが、偶には「和光から時計修理が終わった連絡が来たから・」とか、「画材屋に行って油絵具買ってくるは・」などと家人を上手く言いくるめて、一人で銀座とか自由が丘に昼過ぎに出かけることがある。そんな際は、用事はもともと無いに等しいので、さっと済ませ、午後3時過ぎからの至福の一杯となる。銀座では3丁目らん月地下の「酒の穴」や6丁目「そば処よし田」、自由が丘では居酒屋「金田」。暖簾をくぐれば、時節柄アルコール消毒と体温測定。まだ数人のカウンターに恐る恐る座れば、常連呑兵衛達とのマスク越しでの目と目の会釈である。

昼下がりの一杯となると、矢張りゆったりと、まったく「もつきり酒」に限る。升の中にグラスを置き、日本酒を一升瓶から升に零れる程なみなみと注ぐ。先ずは表面張力で盛り上がったグラスに顔を近づけ唇を当てて軽く啜るのである。「……アツい美味い……」と笑みも零れる。

しかし、まだ日も暮れぬ4時ごろからの酒で、貧乏性でついつい呑みすぎてしまう。「もつきり酒」の後は、どうしても行きつけのバーではじめの一杯と行きたいところである。世の中緊急事態宣言で、特に飲食店営業狙い撃ちで、8時閉店。7時からは、アルコールオーダー禁止というお上の通達があり、慌てて追加オーダーし、くたくたと飲みすぎてしまうのである。

「おーっつ、雪が降ってきたぞ……。春の雪、いいね……。それじゃー、今日の締めで、マティーニ……ドライで……」

銀ブラやボルサリーノに春の雪

酔宵子

楽しい時間 102

山本紀久雄

2021年3月号

九代目市川團十郎・・・其の八

弾左衛門は、自分は鎌倉時代から同じ役目をしているという「由緒書」を、江戸中期の享保四年（1719）に町奉行に提出した。つまり、江戸時代も同じ役目を担っていると申し出たのである。その「由緒書」には次のように書かれている。

《私先祖撰津国池田より相州鎌倉へ罷下相勤候処、長吏以下の者依為強勢、私先祖二支配被為仰付候》

ここに書かれた撰津国池田（現・大阪府池田市）から、鎌倉へ移転し、鎌倉幕府へ勤めるに至った経緯は前号で述べたが、実は「鎌倉の弾左衛門は江戸に進出していない」のである。

江戸にもともと在住していたエタ頭を、徳川幕府が弾左衛門と名付け、ニセの系図を作らせたのである。その理由を『弾左衛門の謎』（塩見鮮一郎著 河出文庫）が説明する。

家康は年天正18年（1590）8月1日、正式に関東「御入国」したが、この13日後に家康の愛馬「花咲」が死んだ。そこで動物の死であるから、その処理をするため、慣例通りにエタを呼んだ。

その呼ばれたエタはどこから来たのか。日本橋あまたな「尼寺」から来たという記録が享保年間に記した大道氏友山の「落穂集追加」に書かれている。

この尼寺とはどこか。今でいえば、日本銀行があり、三越デパートがあり、三井ビルがあるあたり、常盤橋に對面していると云う。

この「尼店」にいたエタの役割を家康もすぐに見抜き、引き続き利用しようと思い、その時期は早いタイミングだったろう。何故なら江戸落城という混乱期には、処刑や死体処理など、エタの手伝いが必要とする仕事があるからだ。その後、エタ村は伝馬町でんまちょうと呼ばれるところに移転した。今の中央区日本橋小伝馬町で、十思公園になっているが、徳川時代を通じて、この場所におちついた。

「尼店」から「伝馬町」への移転交渉の中でエタ村の人たちは難色を示した。長い間住み慣れた場所を離れたくない。この移転交渉の過程で、エタ村のカシラに「弾左衛門」の称号（役名）が与えられた。

このように「弾左衛門の謎」が述べ、そう

なると、家康が使役する賤民のカシラは、それなりの由緒がなければならぬ。そこで「頼朝以来のエタ」ということにしたというのである。「尼店」にいたエタは、頼朝に仕えた「長吏」の家系だという、ニセの系図を作ることになったのである。

実は、「尼店」にいたエタ頭は「矢野」といった。これが弾左衛門となったわけである。したがって、まわりの人たちはずっと矢野と呼んでいた。弾左衛門の墓は「矢野氏墓」として浅草にある。

ここからいよいよ前号で触れた二代目市川團十郎が記した



（台東区の本龍寺「矢野氏墓」）

「勝屍子事件」に入りたい。

江戸弾左衛門の世襲五代目の時、宝永5年（1708）というから今から313年前。京都四条からくり師小林新助、というよりからくり人形専門の興行師が、大事件の仕掛人になった。

小林新助は何人もの「人形遣い」を組織して芝居小屋で興行を打つ親分であるが、これから述べる事件を『江戸公事日記』として書きとどめたのである。

小林新助が江戸へ行くきっかけを作ったのは村山平左衛門である。京都村山座の名代でありながら、江戸での活躍の方が長かった。「名代」とは奉行所から許可された営業権である。ところが、この村山平左衛門、金に困っていた。『江戸公事日記』に「こまごまと金銭にかかわる話題が書かれているが結論は次のようになつた。

《兎角ケ様成事は小林新助を頼相談致候は、可然と被申候て》
とにかく、こういうことは小林新助に相談するに限る、ということである。

呼ばれた小林新助は、何とかしてみようと引き受け、たまたま江戸から来ていた清七に相談すると、清七は金を持っていて、それを村山平左衛門に貸し、返済金に充て、村山は江戸に向つたが、この年の宝永4年（1707）には、二つの大災害が発生した。

一つは宝永地震。10月に東海道沖から南海道沖を震源域として発生した巨大地震である。南海トラフのほぼ全域にわたつてプレート間の断層破壊が発生したと推定され、記録に残る日本最大級の地震とされている。

もう一つは富士山の大噴火。今日に至るまで、最も新しい富士山の噴火となっている。噴火は約2週間続き、噴煙から降下

したスコリア（火山噴出物の一種で、塊状で多孔質のものうち暗色のもの。岩滓ともいう）や火山灰による火災やそれらの急激な堆積などで、主に富士山から東側の地域で甚大な被害が発生した。

二大災害で連絡は一時途絶えたが、翌年の宝永5年（1708）1月19日に小林新助は江戸に向い、堺町で興行した。

これを見に来ていたのが千葉・正木村の庄屋の弟平蔵で、人形芝居に感動し、是非、村人に見せたいと申し出て、正木村で興行を行い、次の興行を館山の「さなぐら村」で行った。「さなぐら村」とは、真倉村と書き、今の館山市城山公園の東に位置し、ここで興行していると、

《江戸弾左衛門手代革買治兵衛と申す穢多》がやつてきた。

この「弾左衛門手代」は、公式に認められた役名と考えてよい。幕末に弾左衛門は「手代」について以下のように説明している。

《鎌倉以来私手二付候譜代家来筋之者六拾五人、今以連綿卜子孫相続罷在》

弾左衛門には「譜代家来」がいたのである。これは徳川の体制が賤民層とそうでない人たちのふたつから成り立っていて、徳川が支配するのは「そうでない人たち」で、賤民層を支配するのは関東で弾左衛門ということになる。

弾左衛門手代・治兵衛は、人形浄瑠璃の芝居興業がエタ身分の許可なく行われているのに驚いたのである。幕府公認の江戸四座（中村座・市村座・山村座・森田座）以外の小屋では、弾左衛門に話を通して、規定の「槽銭」を支払うのが決まりだった。しかし、今回は何の申し出もない。革買治兵衛から見れば、一座はもぐりだということになり抗議したのである。

「勝屍子事件」について随分長い前置きだったが、ここから始まったのである。次号続く。

絹の話 (126)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

中国の昔話 蚕と馬

古来より中国では馬は蚕の品種改良の神様とされ、養蚕発祥の江南地方では今日でも正月に「馬に乗り三角の旗を立ててお供を連れた蚕神」の画を家の門や蚕具に貼る習慣があります。

また月が火星⇨馬の所に来たら掃き立て（種紙についての蚕から羽化したばかりの毛子けこを蚕卵紙から掃き集め、新しい蚕座に移すこと）の準に入ります。

娘に恋した馬（クワコ⇨家蚕⇨養蚕）

むかし昔の戦乱のおさまらぬ中国で、一頭のたくましい牡馬おすうまが飼われている家の父が出征し、一人の娘が寂しく留守を守っていました。娘は父親の帰りを待ちあぐね、戯れに馬に「お前がお父さんを迎えに行き、お父さんを無事連れて帰って来たら、お前のお嫁さんになってあげてもいいわよ」と言ったのです。すると馬は手綱を切っ

て狂ったように走り去り、父親の居場所を探し駆けつけました。父親は家に何事か起きたのに違いないと思い、馬に乗って急ぎ帰宅しました。家には何ら問題はありませんでした。馬の心根に感動した父親は馬に餌を沢山与えました。ところが馬は餌には見向きもせず、ただ娘の一挙手一投足に全神経を高ぶらせていました。不思議に思った父親は娘に事の真相を問い正して驚きました。

「こんな事はあつてはならない！家の恥になる！外に知れてはならぬ」と言つて、馬を殺して皮を剥ぎ、庭に干しておいたのです。ある日娘がその近くを通りかかると馬の皮が急に娘を包み込んで舞い上がり飛び去つてしまいました。その後桑の太木に引つ掛かっているのが見つかりました。娘はすでに蚕となり枝の間に繭を作っていました。その繭から糸を揚げたところ、不思議なほど糸はスルスルと切れずに巻き取れ、糸の量も多く採れました。それを見た農家の人達は争うようにその繭の種を手に入れて育てるようになりました。

いつしか人々は蚕の事を「桑蚕そうざん」と呼ぶようになりました。この頃桑蚕が家畜化されて、品種改良が進められたと考えられます。今日でもクヌギ系の葉を食べて繭を作る虫を「柞蚕」、栗の葉のそれは「栗蚕」、ヒマの葉では「ヒマ蚕」と言っています。

この話は、蚕の品種改良を伝える貴重な昔話です。

真綿になった馬（繇↓糸）

四千年以上昔の中国に、暦を作り徳をもつて民を治めたい舜帝に美しいお妃さまがいました。ある時、馬役人が一頭の馬を庭に引き出し手入れをしていました。たまたま妃が御簾の中からその様子を見ていましたところ、一陣の風が吹き前の帷が捲り上がり、人目に触れたことのない妃の姿を馬が見てしまいました。それからというものの、馬は食う事も飲む事もせず、痩せ衰えてゆきました。ある夜、その馬が妃の夢枕に立ち「わたくしはお庭でお妃様を一目見た時から、寝ても醒めてもお妃様のお美しいお姿が忘れられなくなりました。しかし、しょせん私は畜生の身、死んで蚕となり、繇なまとなって御身に添いたく存じます」と泣きながら訴えました。果たして翌日馬は死んでしまいました。その馬を野外に埋めたところ、沢山の蚕が生まれ、桑の葉を食べて繇を作りました。それを隣れに思った妃は、それから繇を作り身に纏った所、一層艶やかになられたそうです。

これは柔らかく軽くて温かい真綿の素晴らしさを伝えている物語ですが、このお妃様かどうか判りませんが、この時代に繇を作るため繇を煮ていて、蚕が吐糸した一

本の糸が湯気と一緒にふわふわと揚がっているのを見つけたのです。これが糸（生糸）の発見です。

その時、煮ている3粒の繇に撚りをかけなが糸を揚げる様を見て、糸という象形文字が出来たと思われれますが、歴史書には5粒と記されています。

その後絹はギリシャ、ローマを始め、世界各種族の羨望の品となり交易の発達と共に製糸、精練という技術を獲得した漢族は大発展に繋がってゆくのです。

中国古代織物と結城紬

中国浙江省の四千七百年以上前の遺跡から出土した絹の織物は縦糸緯糸とも撚りのかかっていない糸で織られていました。当時ミャオ族の居住するこの地方では揚げた細い「糸」はなく、太い手紬の糸が使われていたと思われれます。機織り技術としては非常に熟練を要する作業で、今日でもタイ、ラオス、雲南の山岳地域に暮らすミャオ族などに受け継がれています。日本では奈良時代から続き、国の重要無形文化財、ユネスコ文化遺産に指定されている結城紬に見ることが出来ます。

日本への南方（浙江省方面）からの絹生産技術伝来が垣間見られます。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2021年3月29日

それぞれ

春らしい陽気になりました

本田カイロのアプローチにあるチューリップなんです
が芽が出た！

と思いましたが瞬く間に背が伸び

チューリップの形が出来上がりました

その後

わずか1日で花の蕾に色がつき後は開くだけです

1か月逢わないだけで心身ともにビックリするほど成長する

青年の様な変貌ぶりに驚きました

2週間くらい前に

施術中の患者さんの背中に虫がついていました

何の虫かな？と思いつつ探ろうと思ってみると

蚊 でした

3月の中旬に蚊です

成長しかり 人間しかり 自然しかり

皆緒ではなく予定通りではない

色々な形や感覚があるから面白いですよ

今日も笑いながら行きましょ

2021年3月31日

心地よいのですが…

早いもので今日で3月も終わりです

梅雨入り前の4月～5月に吹く風は

優しく穏やかでとても心地良

幸せな気分になります

しかし

花粉と黄砂が混じっていますので

4月の風は要注意になってしまいます

黄砂に関しては

呼吸器系へのダメージによる

咳

鼻水

痰

倦怠感

軟便

といった症状が長く続きます

1日2日で回復しないのが厄介なんです

それにくわえ花粉

アレルギーが起こりやすい状況が続きます

そうしますと

今まで大丈夫だった化学繊維や食物や鉱物などにも

身体が過剰反応しアレルギー症状が出たりします

ですので

アレルギー物質をなるべく体内に取り込まない様に

身体の外へ排出するように行きましょう

身体の中から免疫力を上げ皮膚なども守って行きま

しょう

今日も笑いながら行きましょ

「江上浩二の独り言」41 江上浩二

放射光ってなに

放射光について眩きたくなかった。というより、三河アラガを主宰されている今泉さんの「ことのはスケッチ(370) 2009年(平成21年)10月」に世界最高性能加速器という壮大な題目が冠されている事が非常に気になったのである。

学生時代と卒業後民間企業の研究所に勤務していた頃に少し関わった私の歴史みたいな出来事である。放射光と聞くと、どんな光?何か面白い?電球でなくどうやって光らすのと?ワクワクする気持ちが小さな子供だけでなく、大人にとっても高まると思うが、技術的解説風になつて申し訳ない次第である。1976-78年、私が某大学院の研究室に在籍していた時期に、仏のグルノーブルが何処かで電子を高速に加速出来る加速器が稼働し始めていて、人類初の装置としてのデータと加速器から放射される光を使った観測研究が公開されていた。当時を振り返ると、そんな研究に就けるのかというワクワク感があった。

先ず、放射光と呼ばれるものが如何なるものか、その発生原理を簡単に説明したい。電子ビームを真空中で光速に近くまで加速させ、ある時点で磁場により直線方向から少し曲げると、エネルギー保存則により、電子ビームが曲がった分だけのエネルギーが円弧の接線方向に発生する。その度合いによつて、電磁波光として紫外線から、長波長X線、短波長X線、ガンマ線となる。このとき、電磁波を光の波長と捉えると連続した波長で発生出来る。これは強度も非常に強くすることが出来るので、色々な実験を想定すると短時間で行えるので非常に都合がいい。

私が学生の頃は国家予算がようやく取れそうになり、その加速器が稼働し始めたら、どのような観測実験が出るか、当時詳しくは知らなかったが、各大学の教授によつて担当が振り分けられていたのではないか。私が研究室で指名されたのはX線の異常吸収域で物質の構造を調べるための事前資料研究で、関連の海外論文調査とゼミで定期的にサマリーを紹介する程度であった。

1978年には修士を卒業し、民間企業の研究所に勤務することになり、半導体材料の研究がテーマとなった。そこでは、放射光発生器ではなく、通常のX線発生器を

強力になるように設計した装置を導入し、完全結晶中の欠陥や薄膜結晶の物性を調べ始めた。通常のX線発生原理はある金属に強力な電子線を衝突させ、その金属に特有な特性X線のみが発生するだけで、放射光のように連続波長帯とはならない。当時、銅、モリブデン、銀などの金属を使った。波長が $0.6 - 1.4 \text{ \AA}$ オングストロームで、ナノメートル単位だと $0.06 - 0.14$ となる。可視光の約 1000 分の 1 で物質を構成する原子間距離レベルで非常に短く、エネルギーも高い。

そうこうしているうちに、筑波研究所地区に加速器が建設され始め、初ビームは 1982 年に成功し、 1983 年には大学だけではなく、民間企業にも有料で開放される共同利用が決まって、研究所の物性測定チームは利用を前提に装置の設計や実験の計画を立て始めたのを覚えている。私はそのチームのメンバーではなかったが、従来の強力X線発生装置での想定実験や完全結晶からの回折X線強度曲線の計算などのサポートをした。

私はどちらかと言うと 1980 年頃から日米半導体抗争みための政治・経済が絡む事態になって、国産で高度に3次元的に集積化したメモリ素子を作り込む薄膜半導体結晶の作製や光学的、電子線回折を応用した新しい評価手法の開発に従事した。その間 1978 年から

1985 年まで、約7年在籍した研究所を退職し、米系外資企業に転職し、現在のインターネット網の礎となる光ファイバー通信の新規事業開発を立ち上げ、放射光とは離れることになった。しかし、大学の研究室の当時の後輩がX線の異常吸収研究の調査をやっていること、筑波の装置が稼働し始めたこと、前職の民間企業の研究所が筑波地区にも新研究所を建設したこと、さらに、日本国内でも関西地区に放射光装置が欲しいという事になって、スプリング8と呼ばれる第2放射光発生器の建設も決まり、 1997 年に稼働し始めたこと耳にした。驚いたことには、前職の研究所の物性測定チームの大先輩が新しいスプリング8の管理職に就いたことも風の噂にお聞きした。その後、前職の研究所時代の同窓会があり、お会いする機会もあった。

これに留まらず、 2005 年に社会に出て勤め始めた私の息子が創薬の研究をしていて、暫くしてある時X線がどうだとか教えてくれとか、そのうちにスプリング8に結晶化が難しい高分子ベースのサンプルを持ち込み、構造解析を依頼するという話を聞いて、世代のサイクル、時の流れの早さを書物を読むのではなく、放射光を通じて肌で感じたのである。

漢詩研修 (五十五)

千代田岳精会 平井茂行

返 <small>へん</small>	△	空 <small>くう</small>	△	
景 <small>けい</small>	△	山 <small>さん</small>	△	
深林 <small>しんりん</small>	△	人 <small>ひと</small>	△	鹿 <small>ろく</small>
に	△	も	△	柴 <small>さい</small>
入 <small>い</small>	△	見 <small>み</small>	△	
り	△	ず	△	
復 <small>また</small>	△	但 <small>た</small>	△	
青 <small>せい</small>	△	人 <small>じん</small>	△	
苔 <small>たい</small>	△	語 <small>ご</small>	△	王 <small>おう</small>
の	△	響 <small>びびき</small>	△	
上 <small>うえ</small>	△	を	△	
を	△	聞 <small>き</small>	△	誰 <small>たれ</small>
照 <small>て</small>	△	く	△	
らす	△		△	

【解説】 王維は「輞川荘」という別荘に住み、二十の景勝地を詩に詠んでいる（輞川集二十首）。王維の有名な連作「鹿柴」は、そのひとつで、人気のない静かな山の奥深い境地を詠ったもの。

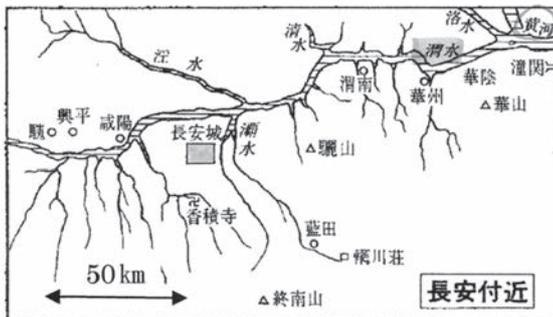
《この詩が作られた「輞川荘」とはどこなところ》

初唐の詩人、宋之問の別荘であったものを王維が買い取った。長安から数十km南東の藍田の地にある。そこには輞川の溪谷が流れ、別荘はやや谷が開ける辺りに設けられている。とにかく広い。敷地の中には、農田・菜園・果樹園・花園・牧草地・山林・沼や沢・中州そして舟を浮かべることのできる小川まで流れている。また建物も風雅で、亭閣が連なり、農作業用の倉庫や使用人の宿舎も完備している。そして風光の良いところには東屋風の休憩所がある。「輞川」という名は、川水が車の輪のような美しい波紋を画いて流れているので、そう呼ばれたのだという。ちなみに、「輞」とは車輪の大輪（外輪）の意味である。王維は任務のない日々には一人この別荘に入り、香を焚きながら詩を詠い、墨絵を描き、琴を弾き、また知己と語りつつ静かに時を過ごした。晩年仏教に帰依していた彼は死を前にしてこの壮大な別荘をすべて寺に寄進したと伝えられている。

【語釈】 ※鹿柴：鹿を飼っておく木の柵のことであるが、ここでは王維の別荘のあった地名をさす。輞川二十景のひとつ。

※空山：人気のない寂しい山 ※人語：人の話し声 ※返景：夕日の光 ※深林：樹木が茂った奥深い林 ※青苔：青々とした色のコケ

【通釈】 シーンと静まりかえった人気のないもの寂しい山には人かげひとつ見えない、だが、どこからともなく人の話し声が聞こえてくる。夕日の光が深い林の中にさしこんできて、木の根元の青々とした色の苔を照らしている。



『仙台の仲間たち』私の宝物』

中屋保之

一九七〇（昭和四十五）年四月、青雲の志!?を持つて社会人生活のスタートを切った。ひと月半ほどの本社研修を終えた私の最初の勤務は「長野支店」であった。当時、独身社員は原則、寮での生活を送ることになっていた。善光寺の裏手の閑静な住宅地の家族寮と同じ敷地内にあった独身寮に着いて、驚愕した。鉄筋四階建て、二階以上が居住空間で、確か十五部屋ほどあったろうか。更に驚いたことに、「独身」が着任早々の私のほか二人の計三人、つまり各階に一人という意味まことにゴージャスな状況であった。

翌年七月、どういう訳か、「仙台支店」への異動が告げられた。独身寮に着いてみて、まともな驚愕！ 長野のそれと同規模の寮に、今度は満室状態である。男臭いったらありやしない。入寮早々、強面の先輩に「おまえ、野球はできるか？」と問われた。少年時代の私たちの遊びの定番であったので、出来たことは出来たが、とても出来ませんと云える雰囲気ではなかったと記憶している。強面の先輩は、実はとても優しい人物で、約三年の仙台支店勤務中に公私ともに面倒を見てもらった。社内での野球大会では、彼がピッチャーで私がキャッチャーというバッテリーを組んだ事もある。もう一人、時に喧嘩渦まく職場で、いつも沈着冷静に笑顔でいる先輩社員は、野球になると人が変わったようになる。雪のちらつく初冬のある休日、当然練習は中止だろうと高をくくっていたら、集合の号令が来たのである。この頃は、我が家に電話は引いておらず携帯もない。なんと、ユニフォーム姿の先輩が車で迎えに来たのである。新婚早々の妻の呆れる顔に見送られ泣く泣く(?)練習に参加したのも懐かしい思い出である。話が前後するが、私が仙台に着任早々、ある課長の指示で私を市内見物に連れ出してくれた同僚がいた。彼は、私より一年あとに社会人としてのスタートをこの地で切ったばかりの三人のうちの一人であった。私を異動させた

理由は、この三人と一緒に育てるといふ意図があつたように思われるが、どうであつたか。彼の運転する車で日本三景のひとつ、松島へと向かつたが折悪しく大変な渋滞であつたため急遽反対の山形方面の秋保温泉へとハンドルを切つた。彼は、山形出身で土地勘あつたのも変更理由であつたろう。「折悪しく」が再び襲つてきた。スピード違反で白バイに捕まつてしまつたのである。課長の指示とはいへ、罰金を会社に請求するわけにもゆかず彼の負担となつてしまつた。このことは、今でも折に触れ話題に上る。つまり、今でも彼との友情は持続している。ほぼ同時に結婚をし、長男に恵まれ、お互いの家庭にも招き招かれの付き合いは、私の宝でもある。続きがある。彼はその後、仙台から私の前任地だつた「長野支店」へ転勤することになる。今でも「あの異動は、中屋さんのせいだ！」と言われる。

それから二十数年後、倉敷支店に単身赴任中の私のところに、神戸支店に同じく単身赴任中であつた彼から「見せたいVTRがあるので神戸までおいで」との誘いを受けて出かけた。映し出された映像に、なんと、懐かしい仙台支店の仲間たちの姿が、もちろんあの「野球の鬼」も三 聞けば、私たちが在籍した一九七一年を中心に関前後五年くらいの年代が、仙台に集まつて旧交を温めているとの事。たくさんの同志が「おいでよ」と画面越しに誘つてくれている。諸般の事情で参加が遅れていた私だったが、数年後には参加が叶つた。が、新型コロナウイルスという邪魔が、二十年ほど続いていたこの会を途切れさせてしまつた。痛恨の極みとは、このことである。

会社の集まりというと大方、だれか偉い人のためというのが通常だが、この会は、珍しく肩書無用の集まりであるのがこの上なく嬉しい。会の名称は『屯会』、世話役のロボちゃん、ヤナコさんはじめ地元仙台在住の女性方の功績の賜物と感謝している。東京在住の永久幹事であるアリヤスくんにも感謝である。

山形出身の「彼」は、テイスケさんという。ちよつとだけ気難しいが、愛すべき生涯の友の一人である。

小齋偶成 しょうさいぐうせい

横山精真

窓まどに入いる爽そう氣き風かせを誘いざないて軽かるし

樹じゆを穿うがつ鮮せん暉き陰かげを盪うたかして清きよし

五ご月がつ青せい霄しょう自じ在ざいに寛くつろげば

華かしよ胥い一つ霎しょう夢む中ちゆうに生しょうず

小齋偶成

入入窓窓爽爽氣氣誘誘風風輕輕 穿穿樹樹鮮鮮暉暉盪盪陰陰清清
五五月月青青霄霄寬寬自自在在 華華胥胥一一霎霎夢夢中中生生

(語釈) ○鮮暉…くつきりと鮮やかな光。 ○盪…ゆりうごかす。 ○青霄…青空。 ○華胥…黃帝が昼寝の夢の中で遊んだという平和な理想郷。 ○一霎…わずかの間。

※書斎とは言うが洗濯物の干し場であるテラスの出入り口。狭くて洗濯物を干す時、取り込む時にはいちいち子机を動かさなければならぬ。

然し一旦落ち着くと自分だけの空間となる。

テラスの直ぐ向こうから俺っている桜の木陰を楽しむ。桜が散ってしまった葉桜を気に入っている。

五月の爽やかな空気が軽やかである。

桜の木の間を射貫く日の光はテラスの上に葉陰を動かして清々しい。

晴れ渡った青空の下、誰にも遠慮する事なく、思いのままに寛ぐ。

やがて、いつの間にかうとうととして平和な理想郷の中にいるのだ。

石神井川

今泉由利

武蔵湧水 春畦に満ち

千朶万枝花下の蹊

塵外の幽谷 紅爛漫

留連 泛英大洋に入る

石神井川

武蔵湧水満春畦

千朶萬枝花下蹊

塵外幽谷紅爛漫

留連英泛大洋入

武蔵Ⅱ 武蔵の国・多摩

春畦Ⅱ 春のこみち

留連Ⅱ ゆっくり流れる

英泛Ⅱ 花びらを浮かべて

大洋入Ⅱ 太平洋に入る

関東平野

武蔵の国の湧き水を、集め流れる石神井川。

両岸より枝垂れる古木の桜花の季。散る花びらは天も地も

川面も覆いて、ゆっくりゆっくり、墨田川へ入る

そして太平洋へと。流れてゆくのをみとどけるのだった。

旅人芭蕉（1） 夏目勝弘

西行を慕い、臨濟宗の仏頂禪師に禪宗を学び、詩禪一致、対象と一体化することによって、その核心に至った。芭蕉の心境の変化を示す一句が（枯れ枝にからすとまりけり秋の暮）

貞享元年八月門人千里をともなつて、母の墓参を兼ねて深川の草庵より旅立つ。

○野ざらしを心に風のしむ身かな 芭蕉
の一句を残して（野ざらしの旅）となる。

死期に会わぬままに亡くなった、母の遺髪を握りしめ

○手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜 芭蕉
と読み、大和へ、西行法師の草庵で

○御廟年経て忍は何をしのお草 芭蕉
そして山城、近江路、美濃、不破の関を越え

○秋風や数も畑も不破の関 芭蕉
大垣の谷木因（谷木）の家に泊り

○しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮 芭蕉
数日滞在の後木因とともに桑名、熱田そして名古屋へ、土地の俳人たちと

（冬の日）五歌仙を巻く、貞享二年正月伊賀で

○旅鳥古巢は梅になりにけり 芭蕉
二月は奈良の二階堂のお水取

○水とりや氷の僧の沓の音 芭蕉
その後、奈良から京都の鳴滝・伏見にて

○我きぬにふしみの桃の暈せよ 芭蕉
山路越えに大津に向かう

○山路来て何やらゆかしすみれ草 芭蕉
熱田、鳴海をして甲斐を経て四月下旬、帰庵

貞享二年四月末に江戸に帰着。そして翌貞享三年三月芭蕉庵で、門人

をあつめ俳席がもたれた。この句会で生まれたのが、
○古池や蛙とびこむ水の音 芭蕉
これが蕉風開眼の第歩となった。

「野ざらしの旅」での、体力の回復を待ち、鹿島詣に、曾良と宗波をともない貞享四年八月十四日水郷鹿島神宮の名月を観るために旅立つ、利根川を夜舟にて鹿島に。翌十五日、鹿島神宮に詣でたあと、仏頂和尚の隠居寺を訪ね、名月の雨の一夜を過す。

芭蕉はつねに仏頂和尚よりの禅の教えて身につけた、常に反省すること
を自分自身の心根に確めていた。

利根川を舟で行徳に赴き、その住人小西自準宅で

○月見んと潮引きのぼる船とめて 芭蕉
鹿島より戻りその日から、次の旅の計画を始めた。「笈の小文の旅」の始まりである。

笈の小文の旅は、野ざらしの旅とは違い、余裕をみせた旅立となった。
貞享四年十月二十五日、旅立つにあたり芭蕉は、露沾や其角らが催した十一日の饞別句会で

○旅人と我名よばれん初しぐれ 芭蕉
さきの野ざらしの旅の悲壯感と違い、旅から何かが得られる生まれる予感

みたいなものが感じられる。

東海道を西へ十一月七日鳴海に泊る。

○ほしぎきの闇をみよと啼くちどり 芭蕉
星崎を含む鳴海湯は千鳥の名所「類船集」に「千鳥↓鳴海」と。

名鉄本線の駅名に鳴海の次ぎに星崎の駅がある。江戸、明治、大正、昭和、平成、令和と六代の時間が流れた今は海まで近い所でキロ余となつてしまっている。

鳴海には郵政省の研修所があった。泊り込みの研修に行った。鳴海駅より坂道を上りしばらく歩いた覚えがある。六十年も前である。

参考・引用資料・松尾芭蕉（芭蕉翁記念館）・芭蕉全句集（角川文庫）・輪廻の詩人篠崎絃一（郁朋社）

「氷魚」のことから (244) 岡本八千代

もうすぐ三月も去つてゆく。しかし、コロナ禍はまだ人間を脅かしている。とくに老人は外出禁止である。うちの庭に出るにもマスクはかせせない。不思議な時世だ。

ごく最近、教え子から「詩歌の森へ」（芳賀徹著・日本詩へのいざない）という本をいただいた。その中に、「五月のなかへ死にゆく母」という題名で茂吉の実母のことが書いてあったので、私の見方で書いてみた。

茂吉の母上さまは「大正二年五月二十三日に、山形県南村山郡金瓶村の農家で、身内の者と村人たちに見まもられながら、一人の農婦が死んだ。」とある。また、母上さまは、「上山温泉に近いこの村のこの家で生まれ、育ち、妻となり母となり、めったに村から出ることもなく五十八年の一生を農にささげて、土に帰った人」とある。名前は、守谷いくという。この人が斎藤茂吉の実母であったのである。

茂吉の「赤光」のはじめの歌に、

白き華しろくかがやき赤き華あかき光を放ちゐるところ。

茂吉

という歌があつて、この歌あたりから作歌が出発点として成長していったとも言われている。茂吉は、明治38年1月に、貸本屋から子規の「竹の里歌」を借りてきて読んで、今までの歌より新鮮な感じを受けて、これなら自分でも出来

る気もちをもつて、作歌に志した、と言われているのであつた。この時茂吉は、数え年の24歳、第一高等学校の三年生の時。友人の渡辺幸造におくつた書簡によつてわかる。それは、「地獄極楽の歌は掛図を昔見しを想ひ出して作りたるものに候が絵を見て作るは正岡子規の「象蛇どもの泣き居るところ」の如きは古今になき姿にて誠に気に入り恐れ入り小生もマネをいたしたる次第に候」とあつて、「地獄極楽図」に飯の中とろとろと上る炎見てほそき炎口のおどろくところ（赤光）また、「水ものまづ飯も食はず真裸に瘦せて炎口の泣き居る処：（書簡）赤き池にひとりぼっちの真裸のをんな亡者の泣きゐるところ：（赤光）くれなるの血汐の池に真はだかの女亡者の泣き居る処：（書簡）」

・ いろいろの鬼ども集りて蓮の華にゆびさすところ（赤光）
・ いろいろの色の鬼ども村集ひ蓮眺めてゆびさす処（書簡）

・ 白き蓮白くかやき赤蓮赤き光を放ち居る処（書簡）

・ ゐるものは皆ありがたき顔をして雲ゆらゆらと下り来る

ところ（赤光）

・ 数あまた仏集ひて、蓮ふり、紫き雲の下り来る処（同）

著者佐藤佐太郎は、昭和三十九年夏、宝泉寺を訪れて「郷里金瓶村（現在、山形県上ノ山市）宝泉寺で毎年掛ける掛図（作歌四十年）」を見たが半折りの軸が二十本ばかりあつた。歌にあたる絵があつたかどうか注意できなかった」と言つてゐる。今回ここまでにする私。

編集室だより【二〇二二年三月】

今泉 由利

○ エジプト・スエズ運河での、コンテナ船座礁のニュースに魅了した。

私の地球がかりの引越しは、パナマ運河を通過したのだった。

○ 太平洋とカリブ海を結ぶ、パナマ運河は、1914年に開通。カリブ海岸から、ガトゥン湖、ゲイラードを経て、太平洋岸のバルボアに。全長80km、通過には24時間かかる。

○ 水位が低い太平洋から入った船は、水門でロックされ、水を満たしたエレベーターで、海拔26メートルのガッソ湖まで上昇。カリブ海へ出るには、同じように水門でロックされ、水のエレベーターによって、海拔0mへ戻される。

○ 新水門開通により、メキシコ湾から、大型貨物船も通行出来るようになった。

○ 太平洋側、通過希望の大きな船が三三五停泊して順番待ちをしている。私の船の順番がきた頃は、夜となりはじめていた。

水門での、水のエレベーターで水位を整えるあたりは、確かに見定めた。

○ 船の甲板の最先端で、足をブラブラして、運河の兩岸を見る。を望む頃は、漆黒の闇。月も星も、船の明かりも届かない。夜が明けるまで、真っ暗闇を見ていた。「こんな真っ黒」もう二度と出逢えない。墨を濃く、どろんとなるほどの濃さ。自分の「黒」をみつけた。

○ 先日、軽トラック二台分の「有ってもかまわないのだけれど」家財を整理した。そのあと、カイロブラクティック先生の診察を受けた。先生が「何をしたのでですか!」とびっくりされた。ヨレヨレになっていたらしい。あちこち不備のような気はしたけれど、こんなものか? と思っていたことも、たちまち違和感なし、にして下さいました。

○ 自分ひとりで解決出来ることしかしかない!と決めているから、自粛籠るのは、楽で良い。出掛けなければならぬことは、何にも無くなってしまう。階段を下りて、小さな図書室までゆくの、一番大きな動作になっていた。今月のカイロブラクティック先生が、「身体中、ポロポロですよ。」と言われる。「え!おとなしく家に籠って、原稿書いていただけです。壊れてる筈がないです。」「そんな筈があるのですよ。」と先生。音無しく、じつとしてると廃人まっしぐらだなんて: 知らなかった。わがままな自分に籠らないで、皆々に助けていただきながら、素直に生きてゆこう。

いろいろなこと気付く、コロナ騒動です。

野菜・果物・まんだら (39) 玉葱



○ユリ科、多年草。中央アジア、インド、パキスタンが原産地。

○約6000万年前には、シュメール人によって栽培されていた。紀元前3000年頃、古代エジプトで食用。ヨーロッパ全域に広まったのは、16世紀頃。



○日本へは、スウェーデンの植物学者のツンベルクが、「江戸参府随行記」に1775年、玉葱が長崎で栽培されるようになったと記される。

○本格的には、明治時代以降。北海道から広がる。

○玄奘三蔵『大唐西域記』には、「ここよりパミールに入る。崖なお嶺は、数百里、深い峻峻。年中雪を戴き、寒風は激しいこの辺り、多く葱を産出するから葱嶺という。

○「中国植物誌」によると葱嶺には、ニラしかなく、玉葱や葱の近縁種は、天山山脈の周辺とある。



○玉葱は包丁で切ると涙がでる。「硫化アリル」が発生。玉葱の細胞が壊れて、「硫化アリル」が発生。刺激臭と辛味がある。

○カリウムをふくみ、生活習慣病の予防に。成分のアリシンは高血圧予防、心筋梗塞予防、動脈硬化予防。

○秋に蒔き、5～6月に収穫する通常の玉ねぎを早取りして“新玉ねぎ”は、みずみずしく、甘く、オニオンスライスに、サラダに、厚く輪切りにして、フライパンで焼くと、たまらなく美味しい。



○世界中のどんな料理法にも合い、健康に貢献し、ありがたい玉葱です。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒114・00211

東京都北区王子本町一・二六・六・A

TEL (03) 5924・2065

◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>

E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒114・00211

東京都北区王子本町一・二六・六・A

今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。